



ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part I

Japanese Studies

Monday 1 June 2009 13.30 – 16.30

J.2 MODERN JAPANESE TEXTS, 1

Candidates should answer both sections.

*Write your number **not** your name on the cover sheet of each Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1

Rough Work Pad

You may not start to read the questions
printed on the subsequent pages of this
question paper until instructed that you may
do so by the Invigilator.

SECTION A

- 1 Translate the following passage from an **unseen** text into English:
[50 marks total]:

夢を見なくなつた。眠りはいつも唐突に訪れ、さながら短い死を経てこの世に戻つてきたようにすべて忘れて目が覚める。毎日がこの繰り返しだった。睡眠薬のせいだとわかつっていたが、いざ夢を失つてみると自分が空っぽで薄っぺらになつた気がした。そればかりか、目覚めている時でさえも現実なのか夢なのか、わからなくなることがある。思考は水の流れに似ている。水はあちこちに流れ込み、途絶えたり、一緒になつて勢いを得たり、どんよりと溜まつたりもする。夢の中の恐怖や歡びや不可思議。それは自分の細かい水路の記憶だったのだ。夢があるからこそ、現実は確かに揺るぎないものだつた。今の自分は、両岸をコンクリートで固められてまつすぐな水路を否応なく流されいく水だ。流れる意思など持てない水。決められた事柄をこなすだけの味気ない日々。現実のつまらなさと夢を失つたことは見事に連動している。この朝の目覚めだって夢でないとは言ひきれない。

内海純一はしばらくベッドに横たわつたまま、アパートの天井を眺めていた。長年の喫煙で黄ばんでしまつた合板ボードに、カーテンの隙間から洩れた太陽の光が当たつている。明るい部分が、いびつな平行四辺形に見えた。外は晴れている。気温は二十五度以上。これが今日の現実らしい。木の葉を揺るがす風の音が微かに聞こえている。内海は木綿のシャツと素肌の間に入り込む爽やかな風の感触を思い出した。こんな晴れた夏の日は、乾いた風が吹き渡つて気持ちがいいはずだ。内海は、北国の夏しか知らないのを少し残念に思つた。ハワイやタヒチなど、南の島に吹く風はもっと熱く湿つてゐるのだろうか。その風に匂いはあるのだろうか。強く吹くのだろうか。

札幌近郊で生まれ、警察官の父親の赴任地を一緒に転々とした内海は、北海道以外に住んだことがない。道外に出たのは、新婚旅行で東京に行つた時のみ。それも、わずか三泊四日の旅。父と同じ警察官という仕事柄、長い旅行は許されないので。新妻は物足りなさそうだったが、内海は東京など一度で充分だと思った。海外に行きたいという願望も持つたことはない。それなのに、今朝の内海は、生きて初めて南の島に行つてみたいなどと考えている。海べりに座つて寄せる波眺め、これまで吹かれたことのない風に吹かれて日がな一日過ごしてみたいと思つてゐるのである。

内海純一	Utsumi Jun'ichi
睡眠	sleep
合板ボード	plywood
いびつ	distorted
木綿	cotton
札幌	Sapporo
赴任地	place of appointment, posting

Kirino Natsuo, *Yawarakana hoho*, jō (2003), pp. 202–204.

SECTION B

Candidates should answer TWO of the following three questions.

2 Translate the following passage from a **seen** text into English: [25 marks]

今、このことを思い出して、自分はこの母に生まれた
この子から、その父を想像せずにいられなかつた。そう
してその人の今の運命までも想像せずにいられない。
自分は妙な連想からこの女の人の夫の顔や様子をすぐ
想い浮べることができた。自分が元いた学校に、級はそ
れほど違わなかつたが年はたしかに五つ六つ上で、曲木
という公卿華族があつた。自分はその男を憶い出した。
彼は大酒家であつた。大酒をしてはいつも、大きなこと
を言つていた。驚異の青い顔をした、大柄な男で、勉強
は少しもしなかつた。二三度続けて落第して、とうとう
自分で退学してしまつたが、日露戦争後、上州製麻株
式会社とかいうのの社長として、何かの新聞でその名を
見たぎり、今はどうしているかさらには消息を聞かない。
自分はふとこの男を想い浮べて、あんな男ではないか
じらと思つた。しかし彼は大言壮語をするだけで別に氣
むずかしいという男ではなかつた。どこか快活で、ヒヨ
ウキンなどころさえあつた。もつとも、そんな性質はあ
てにならぬことが多い。いかに快活な男でもたびたびの
失敗に会えば気むずかしくもなる。陰気にもなる。きた
ない家のなかで弱い妻へ当り散らして、いくらか憂いをは
らすといふような人間にもなる。
この子の父はそんな人ではないだらうか。

女人は古いながらも縮緬の單衣にお納戸色をした帶
をしめている。自分には、それから、女人の結婚以
前や、その当時の華やかな姿を思い浮べることができる。
さらにその後の苦労を考え考へることができた。

汽車は小山を過ぎ、小金井を過ぎ、石橋を過ぎて進ん
だ。窓の外はようやく暗くなつて來た。

女人が一枚端書を書き終つた時、男の子が、「母アさん、しつこ」と言い出した。この客車には便所
が附いていない。

「もう少し我慢できませんか?」母は当惑して訊いた。
男の子は眉根を寄せてうなづく。
女人は、男の子を抱くようにして、あたりを見廻し
たが別に考えもない。

「もう少し、待つてネ?」としきりになだめるが、男の
子は身体をゆすつて、もらしそうだという。
間もなく汽車は雀の宮に着いたが、車掌に訊くと、そ
の間はないからこの次になさい、という。この次は宇都
宮で八分の停車をする。

- 3 Translate the following passage from a **seen** text into English: [25 marks]

九龍半島の小さなホテルに入ると、よれよれの古い手帖てあさうを繰つて張立人の電話番号をきがして、電話をかける。張が留守のときには、私は菜館のメニューを読むぐらいの中国語しか喋しゃべれないから、私の名前とホテルの名前だけをいって切る。翌朝、九時か十時頃にあらためて電話をすると、きっと張の、初老だけれど迫力のある、炸けたような、流暢な日本語の挨拶が耳にとびこんでくる。そこでネイサン・ロードの角とか、スター・フェリーの埠頭ふとうとか、ときには奇怪なタイガー・バーム公園の入口とかをうちあわせて、数時間後に会うことになる。張はやせてけてしなびかかって初老の男だが、いつも、うなだれ気味に歩いてきて、突然顔をあげ、眼と歯を一度に剥いて破裂する癖がある。笑うと口が耳まで裂けるのであるまいかと思うことが、ときにはあるけれど、タバコで色づいた、そのニュツとした歯を見ると、私はほのぼのとなる。ニコチン染めのそのきたならしい歯を見たとたんに歳月が消える。顔を崩して彼がいちどきに日本語で何やかや喋りはじめるとき、私は徽の大群がちょっとしりぞくのを感じる。それはけつして消えることがなく、いつでもすきがあればもたれかかり、蔽いかかり、食いこみにかかるとするが、張と会ってるあいだは犬のようにじつとしている。私は張と肩を並べて道を歩き、自擊じげきしてきたばかりのアフリカや中近東や東南アジアの戦争の話を聞く。張ははずむような足どりで歩き、私の話をじつと聞いてから、舌うちしたり、呻うめいたりする。そして私の話がすむと、最近の大陸の情勢や、左右の新聞の論説や、しばしば魯迅の言説を引用したりする。数年前にある日本人の記者に紹介されていっしょに食事したのがきっかけになり、その記者はとつぐに東京へ帰ってしまったけれど、私は香港へくるたびに張と会って、散歩をしたり、食事をしたりする習慣になつていて。しかし、彼の家の電話番号は知っているけれど、招かれたことはなく、前歴や職業のことなど私は

question continues...

知らないのである。日本の大学を卒業していくので日本語は流暢そのもので、日本文学について
はなみなみならぬ素養の持主だとはわかっているけれど、小さな貿易商店で働きつつ、ときどき
あちらこちらの新聞に随筆を書いてポエット・マネーを得ているらしいとしかわからない。

Kaikō Takeshi, ‘Tama, kudakeru’ (1974), pp. 213–215.

(TURN OVER

- 4 Translate the following passage from a **seen** text into English: [25 marks]

「これは風呂屋ですよ。澡堂というのは銭湯のことです。ただ湯につかるだけではなくて垢も落してくれるし、按摩あんまもしてくれるし、足の皮も削ってくれるし、爪も切ってくれます。あなたは裸になつて寝ころんでるだけでいいんです。眠くなれば好きなだけ眠ればいいんです。澡堂もいろいろですけれど、ここは仕事がていねいなので有名です。帰りには垢の玉をくれます。いい記念ですよ。一つどうです。布を三種類、硬いのやら柔らかいのやらとりかえて、手に巻いて、ゴシゴシやる。びっくりするほどの垢がでる。それをみんな集めて玉にしてくれる。面白いですよ」

明日は東京へ発たつという日の午後遅く、張と二人でぶらぶら散歩するうち、『天上澡堂』と看板をかけた家のまえを通りかかったとき、張がそういうつて足をとめた。私がうなづくと彼はガラス扉をおして入つていき、帳場にいた男にかけあつてくれた。男は新聞をおいて張の話を聞き、私を見て微笑し、手招きした。張は用事があるのでこのまま失礼するが明日は空港まで見送りにいくといつて、帰つていった。

帳場の男は椅子からたちあがると、肩も腰もたくましい大男であつた。手招きされるままについていくと、壁の荒れた、ほの暗い廊下を通つて小さな個室につれこまれた。個室には簡素なシングル・ベッドが二つあり、一つのベッドに白いバス・タオルを巻きつけた客が俯伏せになつて寝ていて、爪切屋らしい男が一本の足をかかえこんで、まるで馬の蹄ひづめを削るようにして踵かかとの厚皮を削つていた。帳場の男が身ぶり手真似で教えるので私はポケットの財布、パスポート、時計などをつぎつぎと渡す。男はそれをうけとると、サイド・テーブルのひきだしにみんな入れ、古風

question continues....

で頑強な南京錠をかけた。その鍵は手ずれした組紐くみひもで男の腰のベルトにつながれている。安心しろという顔つきで男は微笑し、腰こしを二、三度かるくたたいてみせて出ていった。服やズボンをぬいで全裸になると、白衣を着た、慈姑じくわのような、かわいい少年が入ってきて、バス・タオルを手早く背後から一枚、腰に巻きつけてくれ、もう一枚、肩にかけてくれる。手真似で誘われるままに個室を出ると、草履をつっかけてほの暗い廊下をいく。そこが浴室らしいが、べつの少年が待つていて、手早く私の体からバス・タオルを剝ぎとつた。ガラス扉をおすと、ざらざらのコンクリートのたたきがあり、鋳びた大きなシャワーのノズルが壁からつきでていて、湯をほとばしらせている。それで体を洗う。

Kaikō Takeshi, ‘Tama, kudakeru’ (1974), pp. 219–220.